

砲弾騒動再説：第一次大戦とノースクリフ

伊 藤 慎 一

The “Shell Scandal” Re-examined

Shin-ichi ITO

This is the second essay to try to find out the real meaning of the so-called “Shell Scandal” by the Daily Mail during World War I. It is usually assumed that the purpose of the campaign by Lord Northcliffe was to help Mr. Lloyd George to get hold of the premiership. But historians could not agree as to what were the actual processes which led to the coalition government, and the motives of participants. The writer tried to maintain that the real purpose of Lord Northcliffe was to introduce conscription prematurely, and that might be the reason why the campaign failed without tangible results.

1915年5月21日、第一次大戦のさなか、英国最大の新聞デイリー・メールは、陸軍大臣キッチナー卿を非難する大きな記事とともに長文の社説をかかげて卿を攻撃した。

いわゆる“砲弾騒動”のはじまりである。この事件については、1974年に短いモノグラフを書いたが⁽¹⁾、その後になって、英国でもいまだにこの事件が“未解決の問題を残している”と書かれていることを知った⁽²⁾。そこで、前回には十分検討できなかった点、とくにデイリー・メールの紙面に出た記事を中心にして、ふたたびこの事件を検討してみようというのが、この小論の目的である。

砲弾騒動は、通常、ふたつの事件が重なり

あってアスキス内閣の改造を招くにいたった政変的一幕であるとされている。したがって、まずこれらの事件について、その要点を見ておくことが必要になる。

1. ダーダネルス

第1次大戦の西部戦線での戦闘は、ドイツ軍のシュリーフェン計画にもとづく攻撃によってはじまったが、9月はじめ、フランス軍の反撃によって阻止された。それ以来、戦局打開をめぐるふたつの作戦が対立する。

フランス軍と英国の大陸派遣軍とが西部戦線での強襲を主張したのに対し、海相チャーチルをはじめとする政治家たちは、ダーダネ

ルス海峡を強行突破してコンスタンチノーブルを占領する作戦を考えた。

この作戦は、チャーチルがすでに開戦の直後、9月末から考えていたのだといわれ、11月はじめには英国艦隊による砲撃も行なわれているが、公式に問題となるのは11月25日の第1回戦争会議の席上である。⁽³⁾

問題点のひとつは、この作戦が海軍だけの手で行えるか、それとも陸軍部隊の上陸を必要とするか、という点であった。

1915年1月のはじめ以来、キッチナー陸相は西部戦線について疑問をもつようになっていた。陸相が大陸派遣軍の司令官サー・ジョン・フレンチに送った手紙には

『フランス軍がドイツ側防衛線に十分な突破口を開いて戦局の完全な転換をはかることは不可能であると考えざるをえまいと思う。……もしそうであるとすると、フランスにおけるドイツ軍陣地は要塞であって、白兵戦によって攻略することもできず、また完全に包囲することもできぬものと見なしてよろしい。したがって、わが戦線には包囲陣だけを残して、他の場所で作戦を行なうべきだということになる』とあった。⁽⁴⁾

けれども、現実には陸軍部隊を派遣する段になると、十分な参謀陣をもたない陸相の決意はなかなか決まらなかった。3月になって、ようやく第29師団が派遣された。ところが、戦艦2隻が機雷にふれて沈没した。実際に上陸がはじまったのは4月25日であったが、5月12日になって、こんどは戦艦ゴライアスが雷撃によって撃沈された。

驚いたのは第1海軍委員フィッシャー卿であった。74才になる卿はチャーチルによって復職させられたことを徳として、ダーダネルス作戦にはあえて反対しなかったといわれる。しかし、地中海に残された戦艦クィーン・エリザベス号をこれ以上の危険にさらすことにはたえきれなくなって、5月15日、辞表を提出すると雲隠れしてしまった。⁽⁵⁾

17日、保守・統一党のボナーローは、これを理由にしてアスキス首相に正式会談を申し入れた。

“未解決の問題”とされ、“ミステリー”とさえいわれるのはこの後の政変劇である。⁽⁶⁾ 実は、アスキス内閣は戦争遂行に関するもうひとつの難題をかかえていた。それが砲弾問題であった。

2. 砲弾問題

西部戦線が膠着状態になって以来、フレンチ司令官は高性能爆薬をつめた砲弾を要求しつづけていた。⁽⁷⁾

鉄條網を張りめぐらした塹壕陣地を突破するには、人員殺傷を目的とする榴霰弾ではなく、障害物を破壊する力をもった高性能砲弾が必要だ、というのである。

ところが、陸相はこの要求に応じなかったばかりか、ダーダネルス作戦のために兵力を割くことさえ考えはじめたことがわかった。キッチナー信頼するに足らずと見たフレンチはロンドンへ幕僚を送り、直接首相に対して不満を訴えた。

対立は決定的となった。適当な砲弾が供給されないことが直接の敗因であったかどうかははっきりしないまま、英国軍の塹壕攻撃は強行された。3月、ヌーブ・シャペルの戦にはじまる強襲攻撃によって、英軍はわずか3日間に1万2千という損害を出し、5月に入ると、さらに同じような攻撃をくり返して損害をふやした。

すると、5月14日、ノースクリフの支配下にあるザ・タイムズが『砲弾が必要、英軍の攻撃失敗は補給不足が原因、フランス戦線の教訓』と題する、軍事記者レピントン中佐の記事を掲載した。⁽⁸⁾

開戦以来、議会では政争中止の策がとられ、新聞報道は検閲されていたから、戦争遂行に関する論争ははげ口を見つけることができなかった。しかし、この頃になると、負傷して

後送される将兵などの口から、西部戦線での悲惨な状況がひろまってきた。野党議員の間には、議場での質問によって真相を究明すべきだとする要求がたかまった。

そこへフィッシャー卿の辞任が重なった。ところで、野党の要求をおさえるためのもうひとつの手段は、野党の代表を閣僚に加えて戦争遂行の実務に参加させることである。

19日、アスキス首相は内閣改造の意向を明らかにした。問題はどのような改造を行うかきある。このような状況のもとに発表されたのが21日のデイリー・メールの社説であった。

3. 報 道

この日から数週間にわたるキャンペーンは、ふつう“砲弾騒動”と呼ばれる。

しかし、英国軍に高性能爆薬がないことは、当時すでに周知の事実であった。第1次大戦に先だつ10数年の間に、英国陸軍の組織は改革され、英仏連合の作戦についても、かなりの検討が行なわれたのは事実である。にもかかわらず、想定の本根となった考えかたは短期決戦であった。塹壕陣地と機関銃による消耗戦に対する用意はなかった。

戦が年を越す頃になると、さまざまな欠点が見らくなってきた。とくに化学工業に関する弱点は、爆薬ばかりでなく、染料、薬品などの供給不足となって現れ、対策の必要性が唱えられるようになった。⁽⁹⁾ 4月にはロイド・ジョージを長とする軍需品委員会が活動を始めていた。

それでは、内閣改造を機会に、砲弾問題を改めてとりあげ、陸軍大臣を攻撃する必要があったのは、どうしてであろうか。

まず、問題の社説の全文を読んでみよう。

砲弾の悲劇

キッチナー卿の重大な誤算

新内閣組閣手続きは昨日は順調に進んだが大いに売込みにつとめた人もあれば、損をし

ながら身をひいた人もある。今はまことに大切な時である。こんどの新政府は、われわれがこれまでに経てきたよりも、はるかに暗い時期に直面しなくてはなるまい。数日中に国民の前にその名を発表される人たちは、現実には敵が侵略を企てる時に、すなわち1066年以来はじめての重大な侵略に際して、わが国の責任をひきうけることになるかもしれない。つまり、ドイツが戦艦や輸送船の大群を何にもしないままに腐らせてしまうとはとうてい考えられないのである。つごうのよい時が来れば、最後のやけっぱちであるにせよ、その艦隊は、わが国民をおどかして自分たちに都合のよい講和を押しつけるため、攻め寄せてくるにちがいない。だからこそ、現在のわが国におけるもっとも重大なふたつの要素——陸軍と海軍の組織——を、もっとも有能な人に、しかもただちに、ゆだねることがきわめて急を要するのである。

海軍が過去9ヵ月間、フィッシャー卿とチャーチル氏とのけんか——永年の経験をつんだ職業軍人と政治家とのけんかによって大いに苦しめられたことは、今や公然の秘密である。今日ただ今、海軍の支配権がしかるべき所——フィッシャー卿の手に、何の拘束も受けずにゆだねられているかどうかはまだ判然としない。第一海軍卿がアスキス首相に辞表を提出したのは一週間前だが、首相がこれに対してどう答えたか、その内容はわからない。けれども、この大変な時に、もしフィッシャー卿がわが国を代表する専門家の地位にとどまらなるとすると、新政府は日夜悩みの種となる重荷を負って出発することになるにきまっている。大衆の不信感が最初からつきまわっている。海軍大臣の候補者はたくさんいても、海軍戦略の達人はフィッシャー卿をおいてはいない。海軍大臣に、バルフォア氏、オースチン・チェンバレン氏、あるいはマッケンナ氏をすえても公には全く結構である。マッケンナ氏は最近ドイツ人運転手を帰化させ

る件で手ぬるいところを見せたものの、海軍省に在籍中は業績をあげたことを忘れてはならない。われわれはつねにマッケンナ氏をありがたく思ってきたし、氏が海軍のためにフィッシャー卿の政策を守らせようとして、政治生命をかけて同僚とたたかってきた事実の故に、大ていのはがまんしてきたのである。

次は陸軍の大問題である。ホールデン卿は——辞職することは確実であるが——卿が陸軍の制度改革をふたたび行うきざしを見せたむつかしい時期に、デイリー・メールは、キッチナー卿が新軍隊募集の任にあたるべきだとの意見をのべた。キッチナー卿はただちにこれが重大なしごとであることを見てとって、だれでもできる程度にその責をばたした。キッチナー卿がこの新軍隊募集に際して——国王の名ではなく——自分の名を使ったことは、われわれも気に入らなかったし、公にも歓迎されなかった。公衆はキッチナー卿が使った広告方法が大きらいではあったが、当時はどうしても必要な事であったからがまんをし、こうして兵隊は集まった。何人集まったかは誰にもわからない。ドイツ側は二百万と見ているが、この新兵にはほとんど武器が行きわたっていないといっている。ドイツ側のいう通りかどうかはわからない。わかっているのはキッチナー卿がフランスにいるわが陸軍に高性能砲弾を十分供給しなかったことである。

(傍点原文) わが陣地の上を一日中飛んでいるドイツの飛行機には、わが前線にいる人数はわかっているうえに、英国をはなれる港、フランスに着く港にいるドイツ側スパイのおかげでさらに情報が手に入る。

政府とはきわめて近い関係にある自由党系の某紙は、「キッチナー卿とサー・ジョン・フレンチ在仏軍司令官とのけんか」にふれている。キッチナー卿がサー・ジョン・フレンチと同じような軍人であると考えられたことは一度もない。キッチナー卿は人集め役なので

あって——人集めにはまことに適任である。しかし、南アフリカ戦役での戦う軍人としての業績は——参謀長としてのすばらしい組織力を別とすれば——かんばしいものではなかった。ロバーツ卿がバーデバーグでの用兵ぶりについてのべた意見は周知のことだし、これと違った意見をのべる軍人には会ったことがない。キッチナー卿の経歴には、ヨーロッパ戦線で野戦を指揮するのに必要な資格があることを示すものはひとつもないし、この人がこの大戦の実地作戦に干渉することを許すなどという不幸がわが国を見舞うことにはならぬよう、ひたすら願うばかりである。

キッチナー卿が砲弾の種類を取りちがえたという事実は明らかである——これは1900年にポーア人に対しておもに使った砲弾と同じ種類のものである。卿は榴霰弾を送りつけた——が、これは塹壕戦には役に立たない兵器なのである。必要な弾丸の種類は、ドイツ側の塹壕や鉄條網を爆破して、わが軍の勇敢な兵士が安全に前進できるようにする、猛烈な爆発力をもったものだという警告は何回もあった。あわれな我軍の兵士が手にしたのは何千という戦死をまねくような種類の弾丸であった。時たまたま、そのために内閣の危機が生まれた。われわれが望みたいのは挙国一致内閣の誕生である。

わが国は軍国主義ではないので、軍人と軍人との間の意見の相違は理解できない。サー・ジョン・カワズは立派な軍人である——世界一流の軍人である。わが軍の食料補給がすばらしいのはこの人のおかげである。サー・ジョン・フレンチの参謀長、サー・ウィリアム・ロバートソンは立派な軍人である。在仏英国軍の幕僚がすばらしい業績を示しているのはこの人のおかげである。キッチナー卿は立派な軍人である。軍隊募集広告の案はこの人のおかげである。サー・ジョン・フレンチは立派な軍人である。英本国、帝国自治領、インドから集めたわずかな人数で、世界最強

の陸軍、44年間にわたって今度のこの戦いの準備をしてきた残忍な大軍に対抗することができたのはサー・ジョン・フレンチのおかげである。軍国主義でないわが国民は、さまざまな型の軍人の間に差別をするすべを知らない。もし、まかり間違っても、キッチナー卿がフランスへ行って戦線を指揮することになっていたら、アフリカでの戦争とヨーロッパでの戦争との違いについて、おそらくまことに高くつくような実地教育を受けることになっただろう。キッチナー卿は——しかるべき、また必要な助手をつけて——陸軍省にとどまってもらいたい。もっとも、徴兵制度実施の暁には、卿が役にたつ分野はひじょうに減るだろうことはいうまでもない。徴兵制度が行なわれる、しかも近々行なわれるだろうということは、キッチナー卿が余儀なくやっているせっぱつまった手段を見ればわかる。卿が昨日出した広告は40才までの——既婚の——人が募兵に応ずることをもとめているのがその証拠である。こんな広告を出したのはまことに残念で、デイリー・メールは今後は掲載を拒否するつもりである。40才の人はわが国の募兵の限界がくるまで使うべきではない。広告に応じて軍隊に入った既婚者の扶養家族に対する財政支出は近いうちに国民の負担となるはずだが、この非常時にはだれも問題にしようとしなさい。けれども、財政支出は小さな問題である。既婚者の応募によって家庭は破壊され、しごともできなくなり、妻子が悲しむことも考えてみるべきである。

こうした大変な不公平をつづけてはキッチナー卿の組織力を証明することにはなるまい。むしろこれは、インドやエジプトで暮してきたため、卿が英国の現状を知らないことを示すものである。卿には、日曜日にオクスフォード通りからシティへ散歩し、ストランドを通ってみることをおすすめする。何千という、ちゃんとした身体の、若い“なまけ者ども”が国内には残っていて、わが社の記者が昨日

も書いたように“前線へ行ってしまった既婚者のしごとを盗みとっている”のを見かけるはずである。

内閣改造という大きわざの中で、海軍の死活問題、高性能砲弾の不足、フランスへの人員補充は忘れられようとしている。実にこれはほんの数日間にかかわる問題にすぎないのであるまい。先ごろある人が言ったことだが、1915年にはものごとの運びが早くなっていて、普通の年なら半年間もかかるようなできごとが、わずか一週間の間につめこまれてしまっているのである。

数少いわが国の軍隊は待つことはできない。(10)

標題は砲弾となっており、キッチナー卿の名があげられてはいるけれども、全体のねらいはそれだけに限られていないことを見て取れるであろう。

ここにはっきりと現われているのは、砲弾問題や、ダーダネルス作戦とならぶ第3の問題、徴兵制度である。

22日の社説を見ると、その点はさらに明らかになる。まず、見出しから“間違った砲弾、そして間違った募兵法”となっている。

……しかし、今日われわれがとりあげたいのは、支離滅裂な募兵のやりかたである。最近の状況を見ると、すでにかかりの害悪が流されていることがわかるけれども、まだまだその害の一部はくい止めることができそうである。昨日われわれは、40才以下の男子の応募を求めたキッチナー卿の広告をこれ以上受けつけないことを発表した。この年になると大部分の人は既婚である。若いなまけ者や横着書に手をつけずに放ってあるうちは、既婚者には前線へ行けと求めることすらすべきではない。こういう一家のあるじに対する呼びかけほど、“敵を元気づけ”わが国にいよいよ人手がなくなっているのだと思ひこませるた

めのうまい方法は考えられない。現実の問題として、軍隊に入っているべきだが、まだ入っていない青年はたくさんいる。市の立つ日にいなかの町へ行ったり、日曜日にどこでもいい大都市の盛り場へ出かけてみれば、まだはたち代の男の数が戦争の影響をほとんど受けていないことがわかってびっくりするはずである。こういう青年たちがすべて愛国心に欠けるのではない。なかには家族のきずなにしばられたり、また手が足りなくなるのを好まない使用者のわがままに抑えられたりした人もあろう。けれども、大部分の青年がいまだに軍隊に入らないおもな理由は、戦争が危機にさしかかっていることがわかっていないからであるし、最寄りの募兵事務所へ出頭せよと命じられるまでは戦況を理解することはあるまい。

徴兵制度は近く実施されようとしているというだけではない。これが実施されれば全国民が歓迎するはずである。"わが国民は(徴兵制を)受けつけまい"との伝統は、政治家たちが自分の中に深くひそんでいる臆病心をかくしたり、そのいいわけに考え出したりしたものにはすぎない。こま、この最大の危機に際しても、地ならしをしなければならないのは新聞である。競馬場閉鎖問題について、政府のためにそういう運動をするのは新聞の役割だという期待があった。⁽¹¹⁾ 軍隊用の仮兵舎がお粗末だとか、住民のなかに敵性外国人がまじっていて危険だとかいった問題についても、われわれは世の中の関心をかき立てねばならなかった。今度のキャンペーンでも、新聞がはたすべきさまざまな役割についてくどくどいう必要はないし、役をはたしても、とんだ目にあうのが落ちであるが、それは気にかかけまい。徴兵制度についても同じである。すすんでこれを擁護するのは、どうしても必要だということがわかっているからである。しかし、キッチナー卿が、ちまたには元気な青年があふれているのに、大部分は既婚者である

40才の人に向って家庭を捨てよと訴える広告を出せというのなら、いささか異説をたてる権利があると思う。

この問題についてはディリー・メールが、妙なことに、保守統一党の肩を持っていると考える向きがある。そんなことを考える人は、統一党が徴兵制度のために指一本でも動かしたことがあると思ひこむのは直ちにやめてもらいたい。統一党の政治家たちも、ほかの人と同様この問題をこわがってきた。故ロバーツ卿は統一党員ではあったと思うが、まことに独特な考え方の持主であった⁽¹²⁾。だが、卿が(徴兵制度という一訳者)偉大な事業のためにどちらの党からも公式な援助を受けことがあるとは知らない。卿が前線で壮烈な戦病死をとげたのは、その一身をささげた運動の歴史にとってまことに不幸なことであった。もし卿が命永らえていたならば、今日ただ今、国民に向って、すべての人にとって公平適正な方法で軍隊を募集する方法を示してくれたにちがいない。卿が死の直前にもらしたのは今回の戦争の秘密主義はけしからぬということであった。その秘密主義のため募兵に応じている人の数は全くわからなくなってしまった。そしてこの秘密主義あるがために、キッチナー卿が、ほんとに戦力不足の瀬戸際になるまで召集してはならない層の人たちにまで、応募をお願いするという情ない始末になっている。

連立内閣が最初にやるべきしごとのひとつは、しかるべき人に国のために応募することを呼びかけて、金のかかる応募者を集めている現在の不当な制度を廃止することではなくてはならぬ。残念ながら、周知の通り、徴兵対象者の全国登録はまだ行なわれていないし、多少の時間はかかるだろうが、必要な手続きはただちにはじめるべきである。総選挙が行われるわけではないから、国会議員はこの手続きを支持するのを恐れる必要はない。実のところ、選挙民にはかってみれば、不当な募

兵に反対して公平な方法を擁護するのが、思いもかけぬ人気を博することになることがわかるだろう。新政府が、首尾よく成立した暁に、本気にしごとをする最初のしるしは、この国民登録制の準備作業ということになるらう。⁽¹³⁾

砲弾問題をめぐる議論は続いているけれども、この第2日目の社説は、それより多くの紙面をこの徴兵問題に費している。

とすると、ノースクリフが狙っていたのは、砲弾問題そのものではなくて、むしろ徴兵制度の実現ではなかったかという疑問をもたないわけには行きかねる。

砲弾問題も重要であるにはちがいないが、デイリー・メールが公にした事実は『今回の戦争の実態をほんとに知っている人たちを仰天させるはずのものではなかった。陸軍にいる人たちはすべて、衆議院議員もすべて、前線のわが兵士がまちがった種類の砲弾を渡されて、その結果、失わなくてもよい生命を大量に失っていることを知っている』⁽¹⁴⁾まして敵軍は、英軍の砲撃が効果の少いことをよく知っているにちがいない。

しかもなお、このキャンペーンに驚いた人があるとすれば、それは砲弾のことを考えてみようとするような、まじめな人たちではなくて、むしろ徴兵制の主張に仰天した人たちではなかったであろうか。

5月31日の社説は“ザ・デイリー・メールの焼き捨て、その理由”と題されている。21日、キャンペーンのはじまった当日の新聞はロンドンの株式取引所で焼き捨てられた。⁽¹⁵⁾社説はその後の事態の進展について論じている。

……ところが、今や、新たな焼き捨てがいなかの村や一部の工業中心地にひろまっている。これが各地にひろまっていることは確かである。こういうことがひろまるのは、ザ・デイリー・メールが全国的な、また強制的な

兵役をしつこく擁護しているからである。わが国の数多くの、しかもこれまで黙して語らなかつた人たちが、国民兵役制度を恐れ、きらっていることに気づいた人は比較的少い。全面的な国民兵役制度に反対する人には3種類ある。

第1は、いわゆる“強制”なるものにはすべて心から反対する人たちである。“自由な英国人に向けてドイツ式の徴兵を唱える言語道断な新聞の灰を同封します”という手紙をこの人たちはよこす。その多くは筋道だった議論である。その一例をあげると、“労働者”といわれる人たちが陸軍に強制的に入れられているのに、“上流階級”は何とかしてこれをすり抜けている——いいかえると、生まれや、金や、顔で目こぼしにあずかっているというのである。だがこれに答えるには、生まれや、金や、顔のある人たちが、こんどの戦争ではすばらしい働きをしたことをあげたい。昨年8月以来戦死した将校の名簿を見せるだけでよろしい。これら将校の下で従軍した人たちは、いわゆる“上流階級”がその義務を免れようとするものだとはなかなか信じないにちがいない。

第2の反対論者は、強制がようしゃなく適用されて、一家の働き手である息子がいなくなり、家族が路頭に迷うと考える人たちである。徴兵制度が行われている国では、どこにもこんなことが実際に行なわれているところはない。貧乏ならば兵役免除の正当な理由になることはもちろんである。

国民皆兵に対する反対論の第3の——しかも主なる——反対論は、社会のいたる所にいる横着者である。おもうに、ザ・デイリー・メールを焼き捨てているのは、心から徴兵に反対している人たちよりも、この横着者が多い。

第4の階層はアイルランド人の一部である。アイルランドにはザ・デイリー・メールの読者はきわめて多いし、焼却されることも多く、

強制徴兵に対する反対の投書はほかのどの地域よりも多い。スコットランドから寄せられる反論は、社会主義者のまことに論旨徹底したもばかりである。

わが国に徴兵制度をしく機は熟したと軽率に主張する人たちは、現実の事態を先取りしすぎている。国民は戦争について十分知ってもいないし、徴兵制度の内容についても正確には知らない。戦争そのものについても徴兵制度についても、軍隊の中で、また工場の中で、ともに説明をくり返して行すべきであり、ついで、説明する能力と機会のある人たちのひとりびとりがまた説明し直すべきである。

徴兵制度最悪の敵は、悪いニュースを禁止したり、小さく扱ったりさせる——常に楽観的な戦争報道である。新聞はこういうニュースを発表するための公の制度があるために、きわめてむづかしい立場に立たされている。

……良いニュースは公式に“大きく報じられ”，悪いニュースは“小さく報じられる。”その結果、悪いニュースは公衆に理解されず、あくる日には全く忘れられてしまうことになる……その結果、徴兵制度反対論の、万事うまく運んでいるのだから、そんな極端な手段は必要ないという論法が正しいことになる。

……しかるべき組織があれば、徴兵制度といえども無情な、きびしいものではないという説明が必要なのである。……⁽¹⁶⁾

ここでもまた、新聞が焼き捨てられたことを論ずるといふ見出しをかかげながら、その内容の重点は徴兵制擁護にあることが明らかである。

同時に、徴兵問題をまじめに論じようとする段になると、当時の英国に特有な反対論にもふれなくてはならないようになるのがわかる。第1が階級差別であり、第2は労働問題、第3はアイルランド問題である。

この社説に関する限り、論旨は通っているように見えるが、ながい伝統を持つ徴兵制度

に対する反感が、この程度の説得で受け入れられるとは、執筆者自身も考えていなかったのではなからうか。もしそうだとすると、このキャンペーンは新聞成金ノースクリフの自信過剰による暴走というよりは、より大きな目的をめざす準備工作であって、あえて火中の栗を拾おうとする勇敢な、しかも計算ずくの運動であったと考えるほうが適切なのかもしれない。⁽¹⁷⁾

内閣改造に関する、もっとも注目すべき点のひとつは、労働党のアーサー・ヘンダソンが入閣したことであったという指摘がある。⁽¹⁸⁾労働問題は、デイリー・メールの記事にも出てくることであるが、砲弾製造に関係深い重大な問題のひとつであった。

この問題を解決できなくては、総力戦の時代に移行することはむづかしい。アスキス首相は、あらゆる非難を一身に集めながらも、適切な手をうつことを決して忘れていなかったということが出来る。

それよりも大きな難関はアイルランド問題であった。内閣改造からちょうど1年後には、そこで叛乱の計画が発覚する。

その後になって、ようやく徴兵制度は実施されることになった。

砲弾問題のほうも、ほぼ同じ頃になって解決のきざしが現われてくるけれども、それには、ここにあげた問題点の解消に加えて、合衆国からの技術援助が必要であったのだといわれている。⁽¹⁹⁾

その変化を促進したのは、キャンペーンの最中に軍需相に就任したロイド・ジョージであった。

砲弾も、徴兵も、ともに戦時下の英国にとっては、政治の根幹をゆるがす大問題であった。が、不思議なことに、砲弾問題ばかりが大きく取りあげられ、徴兵問題のほうは、大戦が終わったあとになっても、その影にかくれてしまっ、取りあげられることが少い、

ロイド・ジョージはノースクリフ各紙の援

助によって、終には首相にまでのしあがることになったとする向きがある。けれども、このキャンペーンですでに明らかなように、政治家であり、実務家であるロイド・ジョージの言行と、ノースクリフの行動とには、かなりの差があったように思われる。

ノースクリフの社説がのべているように、政治家にとっては徴兵問題は軽々に口にすべき事がらではなかった。それでは、新聞がこのような問題をあえて取りあげるべきであったかどうか。

新聞を焼き捨てるというのは、かなりはげしい反応である。このような反応を経験ずみのノースクリフであったにしても、はたして事前にそこまでの予想をたてていたかどうかは疑わしい。

政治家と新聞人との差は、やがてノースクリフとロイド・ジョージの不和となって現れ、ノースクリフは大西洋のかなたに追いやられることになる。

その結果は、すでにこのキャンペーンの中からも予測できそうである。

注

- (1) 伊藤慎一 ノースクリフと第1次大戦——砲弾キャンペーンをめぐって、『コミュニケーション、行動と様式』東京大学新聞研究所 1974 P.205~222
- (2) Stephen Koss; Asquith, London, 1976, P. 183
- (3) Robert R. James; Churchill: A Study in Failure 1900-1939, Pelican Books, 1973, P. 83
- (4) Philip Magnus; Kitchener, Portrait of an Imperialist, Penguin Books, 1958, P. 370
- (5) フィッシャー卿辞任の様相については文献によって差がある。首相と話しあったと伝えるものもあれば、国王と話をしたと伝えるものもある。しかし、一般には海軍省の自室のカーテンをしめて、スコットランドへ旅行に出かけ、連絡不能になったとされている。

- (6) Robert R. James; op.cit., P.102
- (7) フレンチ司令官の要求がはじまったのはかなり早く、開戦直後にさかのぼるようである。一時はベルギー戦線を作るという議論もあり、その頃からこの要求があったらしい。
- (8) 内容の要点はつぎの通り。

『高性能爆薬が無制限に供給されないのがわが軍成功の致命的障害である。……フランス軍は1日(大砲)1門当たり276発の高性能砲弾を費やして、敵の防禦物を砲撃し去ったという事実が記録されている。……わが歩兵が勇敢に塹壕に突撃したとき、敵兵はちっとも驚かなかった。たくさんの障害物はまだそっくりそのままだった。……わが軍は一度占領した塹壕にがんばり続けることができず、突撃成功の条件が整わぬため援軍を送ることもできなかった……ドイツ軍防衛線をうち破るには、高性能弾と、重榴弾砲と兵力がもっと必要である……』

- (9) Arthur Marwick; Britain in the century of total war, Penguin Books, 1968, P.78
- (10) Daily Mail, 21st May, 1915, P.4
この社説はノースクリフ自身が執筆したものとされている。
- (11) 開戦ののち、デイリー・メールは、競馬は馬匹改良のため必要であることを認めるけれども、戦時には最低限にまで制限すべきだと論じて、焼却さわぎを起したことがある。
- (12) Roberts, Frederick Sleigh (1832~1914) インド、南アフリカで功績のあった将軍、陸軍を改革して、国土防衛のため徴兵制度をしくことを唱えたが成功しなかった。1914年11月フランス戦線で戦病死。
- (13) Daily Mail, 22nd May, 1915, P.4
- (14) Ibid.
- (15) 取引所内で焼却されたのは、タイムズ、デイリー・メールそれぞれ1部ずつであったといわれるが、街頭でも、デイリー・メールを集めて焼却するものがあったという記録もある。
Philip Magnus: Op. cit. P.399 参照
- (16) Daily Mail, 31st May, 1915, P.4
- (17) このキャンペーンのはじまる前、デイリー・メールの部数は1,386,000であった。5月27日までに、うち約6万部が減り、キャンペーンが終るころには238,000が減ったといわれる。しかし、

7月なかばまでに部数は1,100,000に回復した。
ノースクリフ自身は、このキャンペーンによ
って『デイリー・メールの部数がわずか2部
になり、ザ・タイムズが1部になったとしてもか
まわない』と言ったとされているが、新聞をつ
ぶすほどの決意はなく、部数の減りかたについ
ては大いに気にしていたという記録もある。

Tom Clarke, My Northcliffe Diary, 1931
などを参照

- (18) Arthur Marwick; Op. cit, P.86
- (19) Correlli Barrett; Britain and Her Army
1509-1970, Penguin Books, 1974, P.382

(1982年9月22日受付)